

論文

中国の大学専攻日本語教科書の現代史

国語志向と文学思想

田中 祐輔*

概要

本研究は、中国の大学専攻日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形で固定化されて来た要因について、1960年代から現在の間に大学専攻日本語教育に携わった教師29名に対するインタビュー調査結果と、『教学大纲』や行政府資料、学術誌、教科書を作成・利用した教師の報告書から、考察するものである。結論では、日本語教科書の内容を強く規定して来た考えや価値観、目標等を思想という形で顕在化させ、これまで自明とされて来た枠組みの問題点を明らかにした。また、「転換期」にある今日の中国の大学専攻日本語教育では、目標やあり方を再検討することが喫緊の課題であり、教育思想の歴史的研究は、今後より重要な研究領域になることを指摘した。

キーワード

中国大学専攻日本語教育、日本語教科書、国語教科書、精読、教育思想

1. はじめに

1.1 中国の大学専攻日本語教育と日本語教科書

現代中国の高等教育機関における日本語教育は、中華人民共和国設立直後から北京大学、洛阳解放军外语学院、郑州信息工程学院において開始されたが^①（戴，胡，2009）、日中国交を視野に入れた日本語人材の養成が本格的に

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科、日本学術振興会特別研究員 DC (y.tanakaoffice@gmail.com)

開始されたのは 1960 年代からであり¹、著しい規模の拡大が始まるのは、1970 年代に入ってからのものである²。現在、中国の日本語学習者数は約 83 万人と報告され（国際交流基金，2011），日本語能力試験海外受験者数は世界で最も多い（国際交流基金，日本国際教育支援協会，2011）。中でも高等教育機関で学ぶ学習者が多く、中国の学習者全体の約 7 割を占め、図 1 に示すように、世界の高等教育機関で学ぶ学習者全体の過半数が中国の学習者である（国際交流基金，2011）。

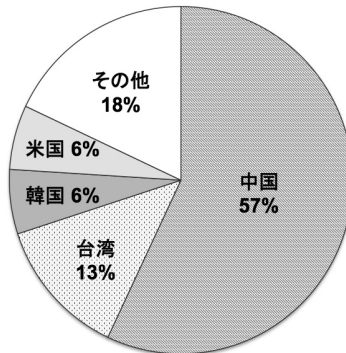


図 1. 高等教育機関における日本語学習者数の国別構成

1 上海外国语学院（1960 年），上海对外贸易学院（1960 年），外交学院分院（1961 年），首都师范大学（1962 年），吉林大学（1963 年），北京第二外国语学院（1964 年），大连日语专科学校（1964 年），华侨大学（1964 年），大连理工大学（1964 年），黑龙江大学（1964 年）に，日本語教育機関が設置された。

2 1972 年 9 月，田中角栄総理が訪中し，日中両国政府が国交正常化の実現を宣言した。1973 年には，中華人民共和国駐在日本国大使館が設置され（1 月），日本国駐在中華人民共和国大使館が設置された（2 月）。1978 年に，日中平和友好条約が調印され，日中の国交回復と交流の深化が急激に進むこととなる。この時期に「第 1 次日本語ブーム」（田中，2011a）が起き，中国の大学における日本語教育の量的な拡大はこの頃から始まった。主要な機関としては，1973 年に北京师范大学に，1977 年には南京大学外国語学院に日本語学科が新たに設置されている。1979 年には神奈川県教育委員会から全国の教育委員会初となる国語科教諭の中国の大学日本語学科への派遣事業が開始（同年に静岡県も開始）された（筆者が実施した調査によると，その後，山梨県，三重県，奈良県，山口県，愛媛県も事業を開始していたことが明らかとなっている）。

学習者数の急激な増加と多様化に伴い、特に中国の大学専攻日本語教育の抱える課題が、倪（2006）や修（2012）等複数の調査研究によって指摘されている。用いられる教科書については、現行教科書の様式・題材の偏りと固定化に対する指摘（竇，李，2000；倪，2006；杨，彭，2010）や、学習者の多様化に合わせた適切な日本語教材の開発と研究を求める声が高まっている（曹，2008）。

1. 2 大学専攻日本語教科書の内容的実態

本研究は、中国の大学専攻日本語教育の中で主幹科目とされる精読³の授業で使用されている教科書に着目する。先行研究では、学習者や教師へのアンケートやインタビュー調査を用いて、教科書で取り扱われる文章の題材や様式、年代、文法、語彙、設問等の偏りや不備が指摘されている。しかしながら、教科書そのものを対象とし、内容的実態を総合的に研究するものは極めて少ない。また、教科書を対象とした場合でも、特定の教科書に限られることが多く、大学専攻日本語教科書の全体像を論じるのが難しいものとなっていた。本格的に教科書の内容について実態調査が行われたのは、2002年に立ち上げられた「中国の日本語教育における主幹科目『総合日本語（精読）』に関する総合研究」という研究プロジェクトにおいてであり、2006年にその成果物となる曹大峰（編）『日语教学与教材创新研究——日语专业基础课程综合研究』が出版された⁴。前掲書掲載の篠崎（2006）では、中国の大学専攻日本語教育のための基礎段階精読教科書4シリーズ計16冊の内容を分析し、（1）基礎段階精読教科書のシリーズ前半では日本語学習用に書き下ろされた文章や会話が中心であること、（2）後半になると、日本で出版された日本語教科書や国語教科書の文章を経て、日本人向けの既成の文章

3 「精読」もしくは「総合日語」と呼ばれる。一般的に大学1年次から4年次まで設置され、時間数は、基礎段階（1・2年次）で週8コマ（1コマ45分）、高年級段階（3・4年次）で週6コマとなっている。なお、中国の大学は2学期制を採用しており、1学期は約16週となっている。精読（総合日語）は大学専攻日本語教育を象徴する科目であることと、精読の教科書自体が、中国大学専攻日本語教育の教育内容や手法を如実に反映していることから、これまで複数の先行研究において研究の対象とされて来た。

4 研究成果を教科書に反映したものとして、北京日本学研究中心による吉岡、修、徐（監）、曹（総主編）（2010）『基础日语综合教程』（高等教育出版社）がある。

で学習する構成となっていることが指摘されている。また、彭（2006）では、1990年代頃から日本語教育のための文法が提唱されたものの、実際には普及していないことが、基礎段階精読教科書4シリーズの内容分析を用いて論証されている。田中（2011b, 2012）は、こうした指摘を踏まえ、教科書の実態調査として、過去から現在にかけての精読用日本語教科書37冊（基礎段階20冊、高年級段階17冊）を分析している。結果、現行日本語教科書の掲載作品・作家は日本の国語教科書と重複する傾向が強く、特に高年級段階では、作品が国語教科書に掲載されたものと一致する度合いが最も高いもので88%を示し、17冊のうち12冊の日本語教科書が50%以上を示すことが明らかとなった。また、日本語教科書と国語科教科書とに共通する「作家」に焦点を当て重複傾向を調べた結果、17冊全ての日本語教科書が50%以上の重なりを示し、最も高いもので100%の重複を示していることを明らかにした。さらに、田中（印刷中）では、過去の日本語教科書にも対象を広げ、1960年代から1980年代までに発行された主要精読教科書計14冊についても調査が行われている。結果、国語教科書との内容的近似性は、文化大革命の影響を受けた1970年代を除くほぼ全ての時期に見られ（図2）、

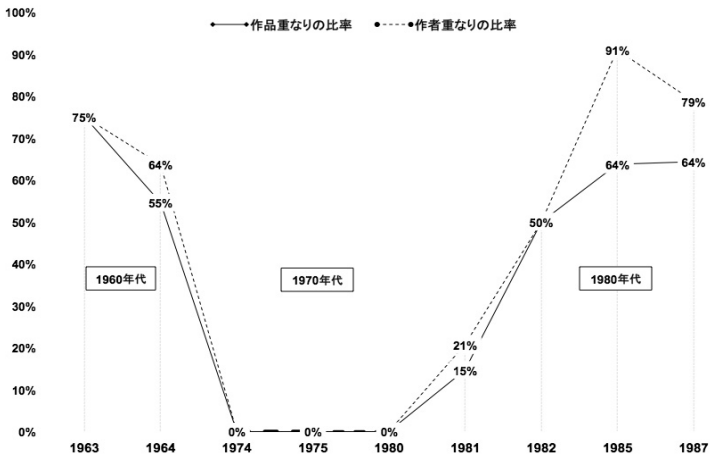


図2. 1960年代から1980年代までの主要精読教科書の
作品・作家の重なり度合いの年別変遷

1960年代に発行された日本語教科書は小学校の国語教科書と、1980年代に発行された日本語教科書は中学校の国語教科書と、そして、1990年代以降に発行された現行日本語教科書は高等学校の国語教科書との重なり度合いが高く、各時代の大学専攻日本語教育の目標が国語教科書の学習段階に基づいて設定されていた可能性がある⁵と指摘されている。

1. 3 国語教育の内容や手法を用いることへの批判

こうした状況に対し、教育の課題の一つとして、第二言語としての日本語の教育は国語教育とは異なるため、国語教育の内容・手法で教えることは問題であると各所で指摘された。これは、国語教科書利用への批判に留まらず、日本で国語教育を受け、帰国後に教壇に立った帰国華僑の教師については「この人たちの言語能力。特に会話力は問題ないが、日本学・日本語学の素養、経験はもちろん持っていないし、日中対照研究ができるとは限らない。再教育する必要がある。」(蘇, 1980, p. 33)と指摘され、さらに、日本から数多くの高等学校国語科教諭が派遣されていることについては「国語を教えるのではなく、中国人に日本語を教えるのであるから、やはり最適ではない。」(蘇, 1980, p. 33)と指摘されている。このように、帰国華僑、戦前に旧植民地の高等教育機関等で教育を受けた者、日本の高等学校国語科教諭といった、言わば「国語」として日本語を習得した者、或いは、国語教育を専門とする者達が、「日本語」を教えることに不具合が生じていると指摘されていたのである。森田(1983)は、日本の高等学校国語科教諭受け入れは県教育委員会との連携で軌道に乗っているかに見えるが、国語教育と日本語教育とは教える内容や方法がそもそも異なるため、中国の教育現場からは実はあまり歓迎されていないのが実情であったと述べている。1980年代後半に県教育委員会から中国に派遣された高等学校国語科男性教諭⁵によると、派遣された国語科教諭が日本の高等学校の国語教科書を用いて授業を行うことは日本語専攻3・4年次ではよく見られ、教科書の内容が学生の関心に合わない、必要とする情報を補うことができないといった問題が報告されていたと言う。

後述する本研究による調査結果からも、「高校からいらした先生がすごく

5 2011年10月に、教授歴35年男性教諭に半構造的面接調査方式インタビューを実施した。

立派な先生で、すごく一生懸命に（*筆者注：登場人物の心情や筆者の意図を）分析するんですよ。でも皆ね、ちんぷんかんぷん。（*筆者注：日本語教育では）語を強調して。使う面が違うんですね。分析じゃなくて。書き方とか、語彙とか、文型とか。」(CI 252~253)という指摘があった。また、実際に直接批判を受けた教師もいた。1980年代前半に北京市の大学で日本語教育に携わった日本人教師 JS 氏によると、『『高瀬舟』とか、『坊ちゃん』とか、まさに現代国語のようなものをやって来ました。で、それをあまりに現代国語のようにやったものだから、学生がブーイングして、もっと日本語を教えてください。』(JS 57~60)という状況になったと言う。

2. 問題の所在

1980年頃から、国語教育の内容や手法を用いることへの批判が起りながら、なぜ、大学専攻日本語教科書は、国語教科書との近似性を持つ形で固定化されて来たのだろうか。先行研究では未だ説明されていないが、中国の大学専攻日本語教科書について考えるには、何よりもまず、過去から現在にかけて、国語教科書との近似性を保つ形で内容が固定化され続けて来たのはなぜなのかという問いを立て、その根本要因を特定する必要がある。

実に半世紀以上にわたって、日本語教科書の内容が固定化された要因の考察には、広く過去にも目を向けた調査が必要である。加えて、教科書の内容が、(1)教育現場における潜在意識や慣習によって規定されるという社会的側面、(2)内容が時々の時事や政治によって左右されるという政治的側面、(3)特定のイデオロギーの影響を受けるという意味での思想的側面、という少なくとも三つの側面を持つことも考慮すると、日本語教科書の内容を強く規定して来た考えや価値観、目標等を思想という形で顕在化させ、社会状況や時代背景と合わせて通時的・共時的に捉え、分析することが求められると考えられる。

3. 研究の目的

本研究では、中国の大学専攻日本語教科書が過去から現在にかけて、国語

教科書との近似性を保つ形で内容が固定化され続けて来た要因を明らかにするために、日本語教科書の内容を強く規定して来た考えや価値観、目標等を思想という形で顕在化させ、社会状況や時代背景と合わせて通時的・共時的に捉え分析することを目的とする。

4. 研究の方法

そこで、本研究では、まず、各時期の日本語教師の言葉の意味分析・概念定義に取り組むこととし、1960年代から現在までの間に大学専攻日本語教育に携わって来た教師を対象にインタビュー調査⁶を行う。さらに、『教学大綱』⁷や行政府資料、学術誌、教科書を作成・利用した教師の報告書を調査結果の裏付け、或いは、傍証として用いた上で、中国の大学専攻日本語教科書が過去から現在にかけて国語教科書との近似性を保つ形で内容が固定化され続けた要因を明らかにする。インタビュー調査の協力者は、スノーボール・サンプリング法⁸によって表1に示す計29名が選出された⁹。

6 インタビューを用いた研究の限界は、対象者の記憶違いや、考えの変様の可能性、或いは、どこまで普遍性のある話なのか（その人物だけに限られた話題であるのか、それとも中国の日本語教育全体の中に位置づけられる話題なのか）等、さまざまな面で指摘できる。しかしながら、個々の取り組みと、それらが集合することによって生じる連関の上に「日本語教育」が成り立つこともまた事実であり、本質的に動態的な「日本語教育」の実態を探るには、限界はあるものの個々の証言やエピソードにも目を向けた調査が必要であると考え、インタビュー調査を研究手法として採り入れた。

7 『中华人民共和国教育法』第十五条で、全国の教育事業を統括・企画・管理するものとされる国务院教育行政部门（通称「教育部」）が定めるもの。位置付けとしては、日本の「学習指導要領」に近く、大学専攻日本語教育の教育目標や内容を定めるものである。

8 大学専攻日本語教育が本格化した1960年代以降の実態を把握するために、また、大学専攻日本語教育が行われた各地域の状況を理解するために、複数の時期・地域の日本語教育に携わった日本人教師・中国人教師にインタビューを行った。

9 協力者のうち、日本人教師をJ列に、中国人教師をC列に示した。

表1 インタビュー調査協力者一覧

No.	協力者	派遣年	派遣先地域	調査実施日
1	JA 氏	1979～1981	江蘇省	2012.02.22
2	JB 氏	1980～1982	上海市	2012.02.23
3	JC 氏	1981～1983	四川省	2012.02.22
4	JD 氏	1986～1988	上海市	2012.02.15
5	JE 氏	1987～1989	江蘇省	2012.03.26
6	JF 氏	1987～1989	遼寧省	2012.02.14
7	JG 氏	1989～1991	四川省	2012.02.07
8	JH 氏	1989～1991	江蘇省	2012.02.13
9	JI 氏	1992～1994	上海市	2012.02.07
10	JJ 氏	1994～1996	北京市	2012.02.06
11	JK 氏	1995～1997	遼寧省	2012.02.22
12	JL 氏	1996～1998	北京市	2012.03.02
13	JM 氏	1999～2000	遼寧省	2012.02.04
14	JN 氏	2001～2002	天津市	2012.03.02
15	JO 氏	2004～2006	福建省	2012.03.02
16	JP 氏	2006～2009	遼寧省	2012.02.09
17	JQ 氏	2010～2012	山東省	2012.02.15
18	JR 氏	1964～1966	遼寧省	2012.02.08 2012.02.15
19	JS 氏	1980～1982	北京市	2012.05.22
No.	協力者	在任期間	所属機関地域	調査実施日
20	CA 氏	1970 年代末～現在	天津市	2011.11.02
21	CB 氏	2000 年代前半～現在	江蘇省	2011.11.02
22	CC 氏	1990 年代後半～現在	天津市	2011.11.02
23	CD 氏	1980 年代前半～2010 年	上海市	2011.12.27
24	CE 氏	1970 年代中頃～2010 年	上海市	2011.12.27
25	CF 氏	1970 年代後半～現在	上海市	2011.12.27
26	CG 氏	1970 年代前半～1990 年代	上海市	2011.12.27
27	CH 氏	1980 年代前半～現在	上海市	2012.01.03
28	CI 氏	1960 年代後半～1990 年代	遼寧省	2012.03.13
29	CJ 氏	1970 年代後半～現在	遼寧省	2012.03.13

調査は調査協力者に対し半構造的面接調査方式を採り、2011年11月から2012年5月にかけて実施された。得られた回答は文字化し、QDAソフト(MAXQDA 2007)に読み込み、佐藤(2006)、京須(2007)に基づきデータをセグメント化し、それに対応するコード名をつけた。コード化された

データのうち、同一コードとして認められる回答（非同一人物）が複数存在するものを一つの概念と見なし、本研究の考察対象¹⁰とした。

5. 結果と考察

5.1 文学作品に託された言葉と文化の最高表現形式としての役割

1964年に遼寧省に設置された日本語学科の一期生として学んだ後に教師となり、中国の日本語教育施策に深く関与した CI 氏は、中国の言語教育において、文学重視の考え方が根深いことを指摘し、次のように述べる。

中国人の感覚で、言葉の最高表現形式っていうのは文学じゃないかと思うんですね。ですから、日本の優秀な文学作品が...その言葉遣いとかとても上品とか...立派な使い方とかいっぱいあって。(中略)今中国の中学生の教材にもすごく良い文章ですね、偉い作家の朱自清という、元々清華大学の1900年代前半の先生ですけれども、彼の文章が今中学生の教科書にもあるんですよ。言葉遣いも今の時代とちょっと離れているんですけれども、でもまだ選んで教えているんですね。魯迅も。(中略)日本の古典は多少中国語の古典と繋がっているところがありますね。ですから中国人の考えで、古典は素晴らしいものがいっぱいあるから、日本語の古典と繋がりがあから、勉強し易いかもしいですけど。中国の外国語大学...日本語という科目が日本語だけじゃなくて文学も入っているんですね。ですから文学部に入ったら...作品は現代だけじゃない...古典も。(CI 212~214, 221~222)

CI 氏は、中国では、「文学」に言葉の最高表現形式を見出すという発想があるとし、日本語学科の授業科目には文学が含まれ、それは近現代のものだけでなく、古典も対象になると言う¹¹。事実、『教学大纲』が発表され全

10 データの最小単位は、話者の発話から話者交替までとし、協力者が話し始めてから終えるまでの発話を調査協力者ごとにナンバリングした（総計：7818）。引用は、協力者の名前と発話番号を記し、分析の際に着目した部分には下線を引いた。

11 中国の大学専攻日本語教育が文学を重視する考えを持つことは、多くの大学の日本語学科が「〇〇大学外国語文学系日語日文科」という名称を用いていることにもあらわれている。

国規模でカリキュラムやシラバスの統一される以前に、既に文学に関係する科目設置の必要性が主張されている。1981年、北京で開催された「中国日语教学研究会」¹²というシンポジウムで、北京大学东方语言文学系刘振瀛氏が「建国以来日語教学的回顧」と題して行った発表を以下に引用する¹³。

現代中国建国以来、中国の日本語教育では、人材養成の目標や具体的なカリキュラム、教授計画を立てる際に、実践的な技能としての言語訓練のみを重視し、研究能力の育成にはあまり注意を払わなかった。(中略)文化に関する素養や専門課題課程の設置が必要であり、(中略)三、四年次では日本文法通論、日本文言文法、日本音声学、詩匯学(*筆者注:「詞匯学」の誤記だと思われるが、引用のため、原文ママ)、語義学、文体論など言語関連の課程に加え、文学作品選...日本古典詩歌選...近代日本文芸思潮史などの文学関連の課程を必修科目又は選択履修科目として設置することが望ましい。(神奈川県教育庁管理部教職員課、1990、p.97 筆者訳)

こうした考えは現在の『教学大纲』にも引き継がれ、「文学を通じて、学生の文学鑑賞力と美意識を向上させ、並びに彼らの視野を広げ、教養を高めること。また、学生が初歩的な文芸評論法を身に付けることによって、将来日本文学研究、日本語教育、又は文学に関する論文の執筆に備えることを目指す。」(教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组、2000、p.6 筆者訳)とされている。大学によっては、高年級段階の精読では文学作品のみを教えるという大学も存在する(JJ 102)。1990年代後半に天津市の日本語学科を卒業し、教師となったCC氏は、日本に対する考え方や、文化理解のために国語教育の内容や手法が用いられていることを述べている。

12 大会名称として用いられている。学術団体としての「中国日语教学研究会」が設立されたのは1982年である。主に日本語、日本文学及び日本文化の研究に関する研究・学術交流を行なっている。当研究会は1981年12月に大連外国語学院にて設立準備大会が開催されており、刘振瀛会長が司会を務めた。また、学術誌『日语学习与研究』が会誌として刊行されている(修、李、2011)。

13 現在、会議資料は公開されていないが、当時会議に参加した日本からの派遣教師が、会議内容を記録した上で報告書として神奈川県教育委員会に提出した資料が神奈川県教育庁管理部教職員課(1990)に所収されている。

高級になると、日本に対する考え方とか、文化理解とか運用能力とか...専門的なものに入って来る。(中略) (*筆者注:派遣された教師は) 国語を教えていました。教科書は高級日語でしたが、中の内容も国語教師が使ってる文章。教えてくれると普通の中国人教師より深くまで教えてくれて。中国人の理解してる文章と日本人の理解してる文章必ず違うんですよ。例えば、この文章だけじゃなくて、背景にあるものは莫大にあるから。考え方も全然違うし。(CC 30~40)

学術誌の中にも、日本語教育と文学教育との関係について論じるものが見られる。例えば、宿, 周 (2007, p. 32) が次のように述べている。

日本の文化、風俗、習慣、生活感情の細かな違いを知るために他者への理解と共感と想像力を育てるために、文学ほど有益な教材はない。中国においても熟知されている川端康成の美しい作品を始め、日本においては素晴らしい文学作品がたくさんある。そういった作品は、日本の文化、風俗、習慣や日本人の価値観、ものの考え方、行動様式、倫理観、美的感覚、生活感情等をよく反映している。日本語専攻の学生を含め、日本語の学習者は、このような文学作品を通じて、日本の文化、風俗、習慣、生活感情や日本人のものの考え方、行動様式などを知ることができ、またそれと同時に、文学内容の表現形式である言葉——文学的表現も習得でき、より「高度」で、より「知的」なハイレベルの言語を身に付けることができるのである。そういう意味から言えば、文学の勉強は真に「実用的」な語学の勉強の一部だと言えるかもしれない。

以上の教師の証言や『教学大纲』、学術誌の記述から、中国の大学専攻日本語教育において、文学作品は日本語の表現形式、日本の文化、風俗、習慣、生活感情や日本人のものの考え方、行動様式があらわれたものであり、文学作品を教材にすることで、高度な言語能力が習得可能であるとする教育思想¹⁴が少なくとも 1980 年前後から広く共有され、文学作品を用いた教育が日本

14 本研究では、教育思想を「教育に携わる者が、実践内容、また、そのもととなるカリキュラムやシラバス、アクションプラン、指針、戦略等を組み立てる上で拠り所とする考え」と定義する。

語教育において重視されて来たことが分かるのである。

5. 2 日中関係の深化に伴う高度日本語人材養成の必要性と国語科教師派遣の影響

1980年頃から起きた国語教育の内容や手法を日本語教育で用いることへの批判や、日本語教科書の題材が小説等の文学作品に偏りが見られる問題(e.g., 陳, 1998)が指摘されてもなお、大きな変化が見られなかった要因には、日本語の模範的な表現形式、日本文化、日本人の思考を文学作品の内に見出し、古典文学から近現代文学まで学ぶことを重視する教育思想が教師間、『教学大纲』、研究者間で広く共有されていたことが挙げられることは明らかとなった。だが、世界全体の日本語教育を見渡しても、大学専攻日本語教育の通常カリキュラムの中で、古典も含む文学教育がこれほどまでに重視され高度な言語能力を身に付けることが要求されるケースは決して一般的ではない。田中(印刷中)では、1960年代の中国の大学専攻日本語教科書の中で、ある程度の基礎力がついた段階の学生を対象とするものには、日本の小・中学校の国語教科書掲載作品が多数見られることが指摘されており、1960年代に日中友好協会の派遣で遼寧省の大学に赴任したJR氏も、現場で実際にそうした教科書が使用されていたと述べている。しかしながら、現在のように中古文学や中世文学、近世文学、そして、場合によっては漢文も指導されることは特定の機関を除けばほとんどなく、古典作品も含めた文学作品が広く取り扱われるようになったのは、1970年代末に入ってからであった(JJ 49~50, JR 558~559, CD 97, CE 180, CF 75, CG 163~164, CJ 258~259)。なぜ、この時期に、このような日本語力が求められるようになったのだろうか。加えて、なぜ国語教科書に掲載された作品が多数採用されるに至ったのであろうか。これについては、中国の国内情勢と日中関係の歴史的な背景にも目を向ける必要がある。

中国では、1972年の日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明、1978年の日本国と中華人民共和国との間の平和友好条約の調印と改革开放政策によって、市場経済体制への移行だけではなく対外開放政策も進められたことや、「四个现代化」¹⁵の一環として、日本の科学技術や社会システム、文化

15 工業、農業、国防、科学技術の四分野での近代化の達成を目標とした国家計画。

といったあらゆる方面への情報収集、及び研究活動も活発化したこと等から、高度日本語人材育成が急務となった。こうした中、幾つかの大学で試験的に上述の文学を中心とした教育が行われていったのである（CF 84～88, CG 162～164）。丁度この頃、大学専攻日本語教育の現場では、日本在住で社会や文化事情に精通した教師の必要性が高まり、日本から多数派遣された。形態としては、各県の教育委員会や日中技能者交流センター、国際交流基金、文部科学省、JICA、青年海外協力隊等の機関と中国国家外国専門家局との共同事業として実施されたが、当時、日本語教育を専門とする教師はまだ少なく、派遣教師は大学で中国語学や中国文学、日本語学、国語学、国語教育学を専門とする教師や院生、或いは、日本の高等学校の国語科教諭が大半であった（蘇, 1980；森田, 1983；CC 28～30）。

派遣された教師達は、文学作品を扱った授業科目を担当することを望まれたが、近現代の作品にしても古典作品にしても、日中国交正常化直後の中国では文物や人の往来が今日ほど盛んではなく、また、文化大革命の名残もあって日本関係の図書が極めて少なく、現地での教材調達が困難であった（CJ 137～148）。そのため、派遣された教師達は自身や学生のための参考資料として、日本で作成された日本語教科書や、日本の国語教科書を中国国内に多数持参した（JA 468～472, JB 113, JC 207～223, JE 10, JG 27～30, JI 78～81, JM 243）。特に、国語教科書はどの教師も自らが学習したり教えたりする中で利用経験があり、最も手近であった。これらは、そのまま主教材として授業で利用されると共に、現地で作成される教科書の貴重な材料となることもあった。

1980年代前半に北京市の大学に派遣された教師によると、中国で作成された教科書を使用する大学は珍しく、基礎段階では、日本の大学が留学生向けに発行した教科書を、高年級段階では、日本の中学校や高等学校の国語教科書を利用することが少なくなかったと言う（青野, 1986）。1979年から開始された神奈川教育委員会による高等学校国語科教諭中国派遣事業でも、中国の派遣先大学側から教師達に対し、小・中・高等学校の国語教科書の持参が求められ、現地ではそれらを用いて授業が行われた（神奈川教育庁管理部教職員課, 1990）。1990年代に入ってから、「日本から持参する参考書や問題集などは中学二年生程度から高校入試のレベルが学生に丁度よいな

どと引き継ぎで教わった」(加藤, 1996, p. 6)と言う。

以上から、日中国交正常化によって深化した日中関係という背景もまた中国における日本語教科書と国語教科書との近似性に影響を与えたことが分かる。即ち、日中関係の深化に伴って日本語人材に求められる力が高度化・複雑化し、そのために言葉の規範性や文化・考え方といった面を理解することがより追求されるようになり、文学教育が行われる必要があると考えられた。そうした中、日本の社会や文化事情に精通した日本人教師の派遣が望まれ、活発化して行く。派遣された教師達は大学で中国語学や中国文学、日本語学、国語学、国語教育学を専門とする教師や院生、或いは、日本の高等学校の国語科教諭が大半であったが、日本語教育と言うよりも国語教育の色合いの濃い授業を要求された。現地での教材調達が困難な中、教師達は自身が学んだり教えたりした際に利用した経験がある国語教科書を持ち込み、主教材として授業で利用し、これらは現地で作成される日本語教科書の貴重な材料として定着していったのである。

5. 3 中立性・合理性・普遍性・規範性の見地から導入された国語教科書

教師達が国語教科書を用いた要因には時代的な背景が存在したことを前節で述べたが、日本関係の資料が充実した 1990 年代以降や、インターネットが普及し大量の情報を入手できるようになった今日まで国語教科書が重要な参照対象とされている理由とは何であろうか。

1995 年に遼寧省の大学に派遣された JK 氏は国語教科書掲載作品の題材としての中立性を指摘し、そのため選定が合理的¹⁶に進むと述べている。「教科書だけをとれば、そんなに思想性の生成もないですね。だから中国がそのまま使っても、質的にしっかりした文章で政治性で問題がない。その部分でいうと国語の教科書は客観的に無難な文章があつて使いやすいし合

16 1996 年に北京市に派遣された JL 氏は次のように述べ、学習者の学習効率の観点からも国語教育の内容・手法が適当であると指摘している。「中国でやった時は、全員が中国語話者で、漢字は殆ど理解した上で、文字も一文字一文字っていうふうには、ひらがなも一文字って感じられるような学生を相手にしていたから。中国における日本語教育が国語教育から離れられないっていうのはそういう要因もあるんじゃないかって思いますけどね。」(JL 79~80)。同様の指摘は CD 氏、CE 氏、CF 氏からも得られた。

理的だと思う。(JK 70)」この指摘は他にも見られ、「現代文をやっていました。ファールルの『昆虫記』、あと新田次郎の富士山の…現代文の教科書で良いものがあればピックアップする。あまり苦労しませんでした。」(JM 204～207)と述べる教師もいた。さらに、次のように国語教科書掲載作品の普遍性を指摘する教師もいた。

(*筆者注：教科書の題材選定に際し) 10年先、20年先に良いと言われる文章なのか、というもので考えるならば、やっぱりその選ばれたものも、国語の教科書を作る時にはたくさんの人が教材選びで苦労しているわけですよ。最近の国語の教科書というのは、わりと今生きている人達の文章を選んでいるので、そんな意味では新しいものでもどんどん載るようになってる。3年前4年前ぐらいに書かれた文章が載るぐらいになってる。そんな感じの文章もあるし、もちろん、芥川も漱石も昔のもの定番と言われるものとの合作みたいな感じで出来ているのが高校の国語の教科書。そういうことの中で選ぶことの方が、まともとか普遍性とかっていう風に考える。また、自分で新書みたいなものを選ぶのは、選んでもその人の文章を延々とやるわけにはいかない。だから、幾つかぐらいしか使えないし、そうやって来ると国語の教科書が教材として優れたものが載っているなあ...という感じにどうしてもなっちゃうでしょうね。(JD 1)

さらに、国語教科書そのものに日本語や日本文化、日本人の考えの規範性を見出す指摘もあった。例えば、1970年に遼寧省の大学で日本語を学び、その後教師となったCJ氏は、1975年に初めて日本の国語教科書を購入した際に「言葉はこういう言い方するのかとか、日本人はこういう考え方するのかとか。これは生きている言葉だ」(CJ 148)という感覚を覚えたと言っている。1970年代前半に天津市の大学で日本語を学び、その後教師になったCA氏も、「(*筆者注：国語教科書を使うのは)それは皆本場だと思って、より日本語らしい日本語を学生達に教えようという考えではないかな」(CA 22)と述べ、教科書そのものに規範的な日本語が掲載されているという考えを示した。

以上、本研究による調査結果から、国語教科書は中立性と合理性、普遍性、そして規範性という面から、中国の大学専攻日本語教育の拠り所とされたこ

とが明らかとなった。

5. 4 高等学校母語教育段階（国語科）に照準が合わせられた第二言語教育の到達目標

5. 2 では、日中関係の深化に伴い、大学専攻日本語学科に求められる日本語人材像が高度化・複雑化し、古典も含めた文学教育が重視され、日本からの派遣教師の活発化もあって国語教科書が用いられるようになったことを指摘した。では、なぜ、日本語人材に求められる力が高度化・複雑化した結果として、高等学校の国語科で教授されるような作品が多数採用されたのであろうか。中国の日本語教育施策に深く関わって来た CI 氏は「中国の外語太の卒業生なら、外国人の高校生レベルの語学力が身に付いたら満足だ、と言うね。（中略）そうすると、日本の国語の教科書は最高ですね。」(CI 237) と述べ、中国の高等教育機関において外国語教育の到達目標を検討する際、その国の高等学校の母語教育科目修了程度に設定されて来たと言う。日本語教育の場合では、「国語」を適切に表現し的確に理解する能力を育成することが目標とされる日本の高等学校国語科が該当する。

現地では日本語教育に携わった日本人教師も、現場では、日本の中・高校生が体得する部分を教育することが要求されたと述べている。

例えばこの日本文学の『鼻』にしろ『無口な手紙』にしろですね、この 2 年目が確か『ころ』と『伊豆の踊子』だったと思うんですけども、それらに関しては、基本的に日本の高校の授業とさほど大差ない形で教えました。もちろん日本語的な部分は入れながらなんですけど、ただそれだけではなく、日本の高校生に教えるような形の...心情理解であるとかそういったものも含めて教えました。そういうことを考えて見ると、日本語っていうものを習得しただけではなく、日本の中学生高校生が体得するような部分も含めて教えてもらいたいっていう意図が（*筆者注：中国の大学専攻日本語教育には）あったのかも知れませんね。(JJ 40)

卒業する生徒達は日系の会社に入る子もいますし、公務員になっていく子もいるんですけど、ただある程度日本人の心情をも理解するっていうところが必要になって来る。日本語だけが喋ればいいってわけじゃないってところは多分あったんじゃないかって思います。だから

らそういうカリキュラムが組まれていて、要するに日本人であれば...
まあ日本の高校までの学習を経た者であれば...基本的に知っている内
容とか。(JJ 46)

このように、中国の大学専攻外国語教育では、対象国の高等学校の母語教
育科目を修了した程度に到達目標が設定され、日本語教育においては「国
語」が志向された。このこともまた、中国の大学専攻日本語教育が国語教育
の内容・手法を採り入れ、国語教科書を用いることが妥当だとされた一つの
要因であることが示唆された。

5. 5 慣習化した国語教育・国語教科書

中国の大学専攻日本語教育において、国語教科書や国語教科書掲載作品を
利用することが続き、既に慣習として定着したことも、固定化の要因である
とする指摘もあった。5. 1 及び 5. 2 で述べたように、1970 年代末から一
部の大学で試験的に国語教育の内容・手法を用いた日本語教育が実践され、
1980 年代初頭には、古典も含む文学教育課程を必修科目又は選択履修科目と
して設置することが提言された。1980 年代後半には国語教育の内容・手法を
用いた日本語教育が中国全土に普及し、それから 20 年以上の歳月が経過した
現在、中国国内で日本語教育を担当する中国人教師は、彼らが日本語学習者
であった頃に日本語を国語教育の内容・手法で学んだものが大半になりつつ
ある (CH 59)。この事情もまた、日本語教科書が国語教科書との近似性を保
つ形で固定化される一因となっているのである。「表面上は、国語じゃダメだ
と言われていたけれども、実際は現地では、まさに国語的なことをやってく
ださいということで...まあそれしかできないですからね。」(JG 200)とい
うように、このような状況では現行の内容・手法で教育せざるを得ないと述
べた教師もいる。1970 年代末から本格化した高等学校の国語教育の内容・
手法が中国の日本語教育現場に定着し長年用いられることによって慣習化し、
教科書の内容を規定する要因の一つとなっていることが窺えるのである。

6. 結論

6. 1 中国の大学専攻日本語教科書を規定して来た要因

本研究は、中国の大学専攻日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形

で固定化されて来た要因について、1960年代から現在の間に大学専攻日本語教育に携わった教師29名に対するインタビュー調査結果と、『教学大纲』や行政府資料、学術誌、教科書を作成・利用した教師の報告書から考察した。

結果、中国の日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形で固定化されて来た要因として、(1)日本語の模範的な表現形式、日本文化、日本人の思考を文学作品の内に見出し、古典文学から近現代文学までを学ぶことを重視する教育思想が教師、『教学大纲』、研究者、の間で広く共有されて来たこと。(2)1970年代の日中関係の深化が高度な日本語人材養成を急務とし、教師派遣や国語教科書の流入を後押ししたことで、当時検討されていた古典文学も含めた文学教育の実施を可能とし、最も手近であった日本の国語教科書が用いられたこと。(3)高度な外国語人材の到達目標としては、その国の高等学校における母語教育科目を修了した程度が目安とされ、日本語教育においても「国語」が志向されたことで、教材としては高等学校の国語教科書掲載作品が適当であると考えられたこと。(4)国語教科書掲載作品は、中立性と合理性、普遍性、そして規範性という面から、中国の大学専攻日本語教育の教材として妥当であると考えられたこと。(5)高等学校の国語教育の内容・手法が中国の日本語教育現場で長年用いられることによって定着し、慣習化したこと。以上の5点が明らかとなった。

6. 2 現代的課題としての日本語教育が目指すべきものの再考

文学の価値や文学教育の意義については、筆者自身も本研究で取り上げた各種論考の指摘に賛同するものである。また、中国の大学専攻日本語教育において、日本の国語教育の内容や手法が果たした役割、国語教育の専門家の貢献は、非常に大きかったと考えられる。

但し、文学教育の意義が大きければ大きい程、そして、国語教育との関係が深ければ深いほど、それらを日本語教育で用いたり参照したりする際に、日本語教育としてどのように考えるのかといった議論は不可欠になる。文学教育について、李(2012, p. 52)は、「荒削りに言えば、日本文学は学問の対象として研究されることはあっても、日本語教育の射程に組み込み、日本語教育の一環としての取り扱いについては表立った議論はあまりなされていないようである。」と述べ、文学教育を日本語教育の中でどのように捉える

のか、についての議論がなされて来なかった実情を指摘している。国語教育についても同様で、国語教育と日本語教育とは異なるという前提に基づいた国語教育の内容や手法に対する批判のみが先行してしまい、十分な検討がなされて来なかった。そのことで、日本語教育の実態や抱える課題が見え辛い状況が生み出されてしまったことは否めないであろう。現代中国における大学専攻日本語教育において、国語教育の内容や手法がある面では重要な役割を果たして来たことは確かであり、その実態を過去まで遡りながら踏まえた上で、我々はどうかあるべきかについて考えることが今後求められて来るのではないかと筆者は考える。

こうした状況から、筆者はこれまで先行研究で指摘されて来たものとは別の問題について指摘したい。まず、国語教科書を用いる理由として、中立性と合理性、普遍性、そして規範性という観点から中国の大学専攻日本語教育の教材として妥当であると回答が得られたが、そもそも国語教科書は、千田（1996）や石原（2005）が指摘するように、政治的にも、思想的にも決して中立ではない。また、文学を重視する教育思想の前提には日本語の模範的な表現形式、日本文化、日本人の思考の理解や習得への希求が見られたが、これは果たして実現可能なものなのだろうか。一度、規範的な日本語・日本文化・日本人の心といったものを日本語教育の目標に据えてしまうと、そこから逸脱したものを周辺化する構造が生まれ（三代、鄭、2006）、「日本国民ではない者」は逸脱する者として差異化されてしまう（大平、2001；牲川、2008；田中里奈、2011）。そのため、規範性を追求する以上、いかなる方策を以てしても、「日本国民ではない者」である中国の日本語学習者は暗に自らを逸脱するものとして位置づけてしまわざるを得ないというジレンマに陥ることとなるだろう。言葉の規範性や普遍的な文化体系が「文学」に存在するとし、その習得を目指す行為自体の不可能性は否定できない。言語や文化は、現実社会に生きる人々の個々の体験や周囲の人々との関係性の内に浮かび上がって来る動態的なものである。日本語教科書も、言葉の規範性や普遍性を示す役割としてではなく、学習者が日本語を通して、それぞれの体験や周囲との関わりのもとに、「ことば」や「文化」を見出して行く活動（e.g., 細川、2007）を実現するためのものへと役割をシフトさせて行く必要があるだろう。

中国における日本語教育は、前提となる基本的な理念や価値観自体の確かさが揺らいでいると言え、新たな価値を創出しなければならない段階にある。この実現には、現代中国の教育思想にまで掘り下げた深い考察が必要であり、現代中国の日本語教育が何を指すべきであるのかについての活発な議論が不可欠であると筆者は考える。だが、こうした再考は未だ本格的に開始されるに至っていない。本研究が指摘した国語教育の内容・手法・教科書の慣習化が日本語教科書の固定化の一因となっているという実情も、そうした問い直しが行われていないことを如実に示すものである。先行研究では、教科書の内容や作成に直接的に関わりを持つアクションプランやカリキュラム、シラバスといったものへの提言や、作成する際に参照されたり基盤とされたりする『教学大纲』の課題を指摘するものはあるが、今後はさらに、深く教育思想にも踏み込み、中国の大学専攻日本語教育が指すべきものを問い直す議論が必要であると筆者は考える。

6. 3 「転換期」に求められる思想史研究

5. 2 で指摘したように 1970 年代の日中関係の劇的な変化は、日本語教育の目標やあり方に関する議論を誘発させた。なぜなら、教育思想というものは、安定した状況が続く「成熟期」においては相対的に重要ではなく、業界や領域が生まれる「揺籃期」や、急速な拡大を見せる「発展期」、衰退を迎えた「動揺期」においてより重要になるからである。実際、日中関係の深化により「回復、発展期 1972-1986」(王, 2006)に入った中国の大学専攻日本語教育は、目覚ましい発展¹⁷の中で中国日語教学研究会の発足(1982)、『大学日本語専攻基礎段階教学大綱』検討委員会の設置(1986)等がなされ、中国の日本語教育の目標と、そのために何をすべきかが協議されている。本研究が指摘した文学重視の思想もまた、この時期に議論され共有されている

17 日本からの教師派遣や図書寄贈の活発化。北京日本語研究センター(通称「大平学校」)の設立(1979年)。同年、中国赴日留学生予備教育が開始され、日本語・日本文化研修留学生招聴プログラムが実施される。1980年には、日本語教育特別事業計画(5ヵ年計画)が進められ、北京語言学院で「全国日本語教師養成班」が設置される。1982年には中国日語教学研究会が設立された。1985年には、大平学校が北京外国語学院に日本学研究センターとして再編成され、第1次5ヵ年計画が実施される。「回復、発展期 1972-1986」は現在の礎となる量的・質的な発展を遂げた時期と言える。

(前掲5.2参照)。

しかし、その後の堅調な学習者の増加に支えられた1980年代後半から2000年代までの「成熟期1987-2000」(王, 2006)には、そうした議論は見られなくなる。教育内容や方法の指針となる基本的な思想は定着しているため、敢えて考える必要性が乏しくなるからである。むしろ、こうした状況下では、既に合意形成された全体として共有すべき思想、進むべき方向に基づいて最適な状態を保つための方法を合理主義的に議論することが求められ、教育現場では目の前の教育をいかに効率的に遂行するかが課題とされる。例えば教科書研究では、掲載すべき語彙や文型は何か、或いは、早く確実に習得するための設問はどうあるべきか、教科書を用いてどのように教えるべきか、といった議論である¹⁸。

それでは、現在の中国における大学専攻日本語教育はどのような状況にあるのだろうか。修(2012)は、(1)育成方法の転換、(2)育成目標の転換、(3)育成内容の転換、という三点から、現在の日本語教育が大きな「転換期」を迎えていると指摘している。これまで自明のものとされて来た方法や内容、方針では立ち行かなくなったということは、それぞれの教師や学習者、教育現場が新たな思想や進むべき方向について議論することが喫緊の課題とされているということでもある。ただし、留意しなければならないのは、いかなる議論によっても、無から有が生じることはないということである。現在の日本語教育が、過去の事象の積み重ねによるものである以上、新たな思想は、日本語教育の「歴史」を踏まえた通時的な視野なしには形成し得ないであろう。

中国の日本語教育が「転換期」にあり、日本語教育の思想を通時的に問い直し、新たな価値を検討することが急務である今日、教育思想の歴史的研究は、今後の日本語教育研究において、より重要な研究領域になって行くものと考えられるのである。

18 この傾向は、中国の日本語教育に限って見られることではない。細川(2004)は日本の日本語教育において、80年代には「効率性」「円滑性」「到達性」の三要素が絶対視され、「無駄を省き、学習者のニーズに合わせて、効率的に教えるという発想」が丁度、経済大国日本の高度経済成長に平行して台頭し、教育内容や母語話者とのコミュニケーションという文脈にまで「円滑」という視点が持ち込まれたと指摘している。

7. 今後の課題

本研究による成果は主に次の三点である。第一に、中国の大学専攻日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形で固定化されて来た要因について、現代中国の日本語教育の歩みを追いながら教育思想やその背景となった社会状況にまで掘り下げた調査・分析を行うことで、日本語教科書の内容を強く規定して来た考えや価値観、目標等を思想という形で顕在化し、各時期の社会状況や日中関係との関わりと合わせ明らかにした点である。第二に、これまで自明とされて来た思想的枠組みの問題点を指摘し、「転換期」にある現在の中国大学専攻日本語教育では、目標や在り方を再検討することが喫緊の課題であることを指摘した点である。第三に、教育思想を通時的に問い直し、新たな価値を検討することが急務である今日、教育思想の歴史的研究が今後より重要な研究領域になることを明らかにした点である。

課題も残されている。本研究では、教育思想の源流については紙幅の制約上扱えなかった。中国の日本語教育における文学重視の考えがどのようなプロセスを経て思想形成されたのかについて、別途報告したい。また、言語教育と文学との関係に関する議論は時枝・西尾論争を始めとして日本の国語教育にも見られるもので、中国での議論が日本の議論とどのような関わりを持つか整理する必要がある。いずれも、本研究が重要課題として挙げた教育思想の歴史的研究の一環として、筆者自身の今後の課題としたい。

文献

- 青野文敏 (1986). 中国における日本語教育について『国文研究』36, 71-79.
- 石原千秋 (2005). 『国語教科書の思想』筑摩書房.
- 王冲 (2006). 中国における日本語教育——過去・現在・未来『対話と深化』の次世代女性リーダーの育成』(pp. 55-58) お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ人社系事務局.
- 大平未央子 (2001). ネイティブスピーカー再考『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』(pp. 85-110) 三元社.
- 加藤明 (1996). 茂木誠氏と上海外大. 神奈川県派遣教師の会 (編)『河江

通信』2, 7.

神奈川県教育庁管理部長職員課（編）（1990）. 『中国派遣日本語教師 10 年の軌跡 1979～1989』 神奈川県教育委員会.

京須希実子（2007）. 介護福祉士養成の質をめぐる政策分析——「検討会」における議論に着目して『東北大学大学院教育学研究科研究年報』56(1), 89-108.

倪鏡（2006）. 中国における日本語教育について——高等教育日本語専攻を中心に『日本地域政策研究』(4), 33-39.

国際交流基金（2011）. 『海外の日本語教育の現状日本語教育機関調査・2009年』 凡人社.

国際交流基金, 日本国際教育支援協会（2011）. 『日本語能力試験結果の概要』 凡人社.

佐藤郁哉（2006）. 『定性データ分析入門』 新曜社.

篠崎摂子（2006）. 精読教材の本文について. 曹大峰（編）『日語教学与教材创新研究——日語专业基础课程综合研究』（pp. 151-156）高等教育出版社.

修剛（2012）. 中国における大学の日本語教育の課題と教材開発「中国における新しい日本語教材の開発を語る」中国大学日本語教材シリーズ完成記念公開研究会.

宿久高, 周異夫（2007）. 日本語教育の中の文学と文化——中国における日本語教育の現状と課題『日本語教育』133, 28-32.

牲川波都季（2008）. 日本人の思考の教え方——戦後日本語教育学における思考様式の言説『文化, ことば, 教育』（pp. 106-128）明石書店.

千田洋幸（1996）. 国語教科書のイデオロギーその2——「平和教材」と「物語」の規範『東京学芸大学紀要第2部門人文科学』47, 207-213.

蘇徳昌（1980）. 中国における日本語教育『日本語教育』41, 25-38.

曹大峰（2008）. 中国における日本語教科書作成——歩み・現状・課題『言語文化と日本語教育』35, 1-9.

田中祐輔（2011a）. 中国における日本語ブームの一〇年代——「80后」・「90后」日本語学習者への学習状況調査から. <http://www.tkfd.or.jp/fellowship/program/news.php?id=102>

- 田中祐輔 (2012). 中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題『リテラシーズ』10, 21-30.
- 田中祐輔 (印刷中). 中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究——1960・1970・1980年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷『国語教育史研究』13.
- 田中里奈 (2011). 「日本語＝日本人」という規範からの逸脱——「在日コリアン」教師のアイデンティティと日本語教育における戦略『リテラシーズ——ことば・文化・社会の日本語教育へ』9, 1-10.
- 陳岩 (1998). 日本語専攻の教学内容改革について. 中国日语教学研究会 (編)『中国日语教学研究文集7』(pp. 199-212) 香港迅通出版社.
- 細川英雄 (2004). 日本学を超えて——日本語教育学の位置づけと課題『早稲田大学日本語教育研究』4, 27-35.
- 細川英雄 (2007). 日本語教育学のめざすもの——言語活動環境設計論による教育パラダイム転換とその意味『日本語教育』132, 79-88.
- 三代純平, 鄭京姫 (2006). 「正しい日本語」を教えることの問題と「共生言語としての日本語」への展望『言語文化教育研究』5, 80-93.
- 森田良行 (1983). 日本語教育界の現状と将来海外で要請される人材について『日本語教育』50, 89-96.
- 吉岡英幸, 修剛, 徐一平 (監), 曹大峰 (総主編) (2010). 『基礎日语综合教程』高等教育出版社.
- 李光華 (2012). 日本語教育の一環としての日本文学教育について——中国大学生への日本古典文学教育を中心に『日本語日本文学』22, 51-65.
- 戴栋, 胡文仲 (主編) (2009). 『中国外语教育发展研究』上海外语教育出版社.
- 竇文, 李庆祥 (2000). 高年级日语精读课教材的内容, 结构, 规模『山东师大外国语学院学报』4, 93-96.
- 教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组 (2000). 『高等院校日语专业高年级阶段教学大纲』大连理工大学出版社.
- 林林 (1991). 『日本文学论集』序. 刘振瀛 (編)『日本文学论集』北京大学出版社, 1.
- 彭广陆 (2006). 大学日本語専攻用の精読教材における文法体系. 曹大峰

(編)『日语教学与教材创新研究——日语专业基础课程综合研究』(pp. 82-97) 高等教育出版社.

田中祐輔(2011b). 关于中国大学日语专业基础阶段教科书与日本中小学国语教科书的比较研究——两者内容异同中所浮现的当代性课题『日本研究集林』37, 复旦大学日本研究中心, 32-42.

修刚, 李运博(2011). 『中国日语教育概览1』外语教学与研究出版社.

杨豪杰, 彭玉全(2010). 日语专业学生心目中理想的精读教材『中国教育学刊』S1, 66-68.

于荣胜(1988). 日本文学研究. 北京大学日本研究中心(編)『思考与借鉴——纪念北京大学日本研究中心成立十周年』93.

付記

(1) 本研究は, 日本中国学会第 64 回大会(於: 大阪市立大学)で発表した「中国の大学専攻日本語教科書の現代史——日本語教科書が包摂する『国語教育』に付与された教育思想的役割」をもとに, 研究対象を広げて再調査・再考察を行い加筆・修正したものである。

(2) 本研究は, 日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「中国の日本語学習ニーズの多様化に対応する『学習者主体の教材開発』に関する実践研究」(2011~2012 年度, 課題番号 23・4780)の研究助成による成果の一部である。

(TANAKA Yusuke)